

佐藤甚次郎先生を偲んで

歴史地理学会の正会員として、また評議員、常任委員等の要職を通じて、本会の発展に尽くされた佐藤甚次郎先生は、2002(平成14)年10月1日、脳腫瘍による虚血性心不全のため87歳でご逝去になりました。米寿のお祝いを目前にされていただけに、まことに残念でなりません。ここに謹んで弔辞を申し述べさせていただきます。

先生は1914(大正3)年11月24日、山形県鶴岡市のご出身で、県立鶴岡中学校から日本大学高等師範部地理歴史学科をへて、1939(昭和14)年3月に東京高等師範学校研究科(地理学専攻)を卒業されました。同年4月には日本女子大学校付属高等女学校に教諭として赴任されましたが、校務のかたわら、さらに日本大学法文学部史学科(夜間部)に進まれ、1942(昭和17)年9月のご卒業まで研鑽を積んでおられます。入学時の口頭試問で史学科志望の動機を聞かれ、「地理を深めるために歴史をやる」と答えて教授を驚かせたというお話は、生前好んで口にしておられたエピソードです。

先生は学校法人日本女子大学とのつながりが深く、前身の日本女子大学校や同校付属高等女学校・付属高等学校の時代も含めると、その勤続歴は40年以上の長きにわたります。その間、1965(昭和40)年2月に東京教育大学から理学博士の学位を取得され、また評議員や学務部長、事務部長といった要職も歴任されました。1983(昭和58)年にご退職ののちは、同大学の名誉教授に推挙され、さらに、1987(昭和62)年11月には勲四等旭日小綬章を受けておられます。

先生のご研究は、日大地歴科時代に手がけられた荘内の漁村調査から始まっておりますが、次第に衣食住に関わる生活文化の地理に重点が移り、1970年代の後半まで多くのご業



(青木栄一 提供)

績が生まれました。その集大成である『生活文化と土地柄』(1976年、大明堂)は、今日までくりかえし版を重ねています。生活文化研究の構想は内田寛一、石田龍次郎、今和次郎、渋沢敬三といった先学との交流の中で培われたものが大きかったようですが、地質学・地形学・気候学などの研究者の知己に恵まれたことも幸いだったとしばしば語っておられました。

先生は衣食住の中で、とくに民家の研究に多くの力を注がれましたが、ご自身は「民家」という用語には慎重で、「すまい」や「住家」、「農家建物」などの呼び方を使い分けておられました。また、「地理学には建築史や民俗学とは異なった研究視点がある」との姿勢を堅持され、後年、家相観や居住習俗上の俚諺、南北日本の文化系統などの問題に関心を向け

られるようになって、つねに自然環境への対応や実生活上の利便、地域差とその意味といった側面への目配りを大切にしておられました。

また町屋の形態にも着目され、いろいろ材料を集めておられたようです。先生のお考えは、街路に面して土間をおく前土間形式の町屋と、店の奥まで長く土間を通す「通りニワ」形式の町屋には有意の地方性があり、町並みが大きく様変わりした今日でも、店と店の間の細い路地の有無が両系統の別を推定する指標になるというものです。地方都市の商店街を歩かれると、よく店と店の境ばかり何枚も写真に撮っておられました。この調査結果は残念ながらまとまった形では発表されませんでしたので、ここでご紹介させていただく次第です。

後年は地籍図・公図のご研究に集中され、

『明治期作成の地籍図』（1986年、古今書院）をはじめ、『神奈川県明治期地籍図』（1993年、暁印書館）、『公図－読図の基礎』（1996年、古今書院）、『千葉県の公図：そのルーツと特色と影響』（1999年、暁印書館）などの著作を相次いで発表されたのは周知のとおりです。このほか、地理教育や地名研究、近世のおこし立て絵図のご研究でも多大のご功績を遺しておられます。

先生は、筋の通った批判精神を大切にされる方でしたが、つねに温雅な雰囲気をつとめ、周囲と接しておられました。紫煙とともに楽しげに語られたお話の数々は、今ふりかえってみると、いずれも教育的な示唆に富んだものばかりで、あらためて先生の学恩が身にしみてまいります。

（佐々木史郎）